

# 学ぶ者山に登るが如し

——わたしの社会学との出会いと近代日本社会学史研究——

川 合 隆 男

- 一 はしめに
- 二 わたしの社会学との出会い
- 三 近代日本社会学史研究
- 四 「戯去戯来」

学ぶ者山に登るか如し

懐かしい顔で一杯で、土曜日なのにおいでいただいて、また遠方の各地よりおいでいただいて誠にありがとうございます。本日のわたしの最終講義にあたって法学部の有末さん、学部長の森さんのご挨拶をいただき、そして多くの方々がわたしの「最終講義」(拙い話、戯言まじまじ)のために貴重な時間を割いてくださったことに感謝申し上げます。また、『法学研究』(第七七巻一号)にはわたしの「退職記念号」の論文集を企画編集していただき多くの方々に論文を寄稿していただいたことにも心よりお礼申し上げます。『タンポポの丘——戯れに來て戯

れに去る。』『タンポポの花―幻の門より出でて野に咲かん―』（春風社）の二冊のエッセイ集の刊行もどうや間に合ったようで喜んでおります。

一 はじめに

「学ぶ者山に登るが如し」という言葉は、結城豊太郎という人のものです。結城はわたしと同郷の方です（結城豊太郎、一八七七一―一九五一、明治一〇―昭和二六、山形県赤湯出身、銀行家・政治家）。赤湯という町にある結城記念館を見学していた折りに何気なく見つけた色紙に記されていた言葉ですが、いまもわたしを励まし続けている言葉です。

「学者如登山 臨雲豊」（臨雲は結城豊太郎の雅号）。わたしは生来の怠け者、自分のペースでしか歩けない。自分に合った山の登り方しかできない。急いで登ってもすぐ疲れてしまうのです。山と呼吸をしながら少しずつ登っていくしかないのかなあと思いつつながら勉強も進めてきました。

また、これも確たるものではないのですが、長谷川如是閑（万次郎）（一八七五―一九六九、明治八―昭和四四、ジャーナリスト、批評家、思想家、在野の社会学者）の「断而不行」（断じて行わず）、「行易不行難」（行うは易く、行わざる難し）という言葉も好きでわたしなりに座右の銘にしてきたようなところがあります。たまたま今朝の『朝日新聞』（三月二三日）の附録「ことばの旅人」に長谷川如是閑の「断而不行」がとりあげられており、ひとり喜んだり、わたしを励ましてくれていたようでもあり嬉しくなりました。

さて、わたしの「最終講義」をするにあたって、どんな内容とタイトルにしようかなと少々悩みました。そこでここ一〇年ほど福沢諭吉の書物をすこしずつ読み始めてきたこともあって、わたし自身があてどなく心細い思

いで学問（社会学）に関心を持ち初めてたどるとしく歩いてきた足跡を福沢のいう「心事の棚卸」の試みとしてお話ししてみようと考えました（『福沢諭吉』『学問のすゝめ』第一四編）。

「人の世を渡る有様を見るに、心に思うよりも案外に悪をなし、心に思うよりも案外に愚を働き、心に企つよりも案外に功を成さざるものなり」（『福沢諭吉』『学問のすゝめ』岩波文庫、一二三頁）

「ただ流れ渡りにこの世を渡りて、嘗てその身に注意することなく、生来今日に至るまで我が身は何事をなしたるや、今は何事をなせるや、今後は何事をなすべきやと、自らその身を点検せざるの罪なり。故に云く、商売の有様を明らかにして後日の見込を定むるものは帳面の総勘定なり、一身の有様を明らかにして後日の方向を立つものは智徳事業の棚卸なり。」（一二八頁）

そこで本日はわたし自身の「心事の棚卸し」の試みとしてお話ししていきたいと思えます。

## 二 わたしの社会学との出会い

レジメに簡単な履歴として載せておきましたようにあてどないわたしの足跡の一端から始めたいと思います。

わたしは昭和恐慌、満州事変、日中戦争、総動員体制、第二次世界大戦、やがて太平洋戦争と社会不安や戦争のうち続く一九三〇年代に東北地方の寒村で生まれました。

一九三八（昭和一三）年七月二五日 山形県南村山郡山元村大字小白府四三三番地（現在上市市）に生まれる（父善五郎、母コノ）

一九五一年三月 南金井村立南金井小学校卒業（一九四五年四月に戦中の国民学校に入学）（いまだに戦争時の体験や民主化の動き等の記憶は消えることはありません）

一九五四年三月 山形市立南山形中学校卒業(草野球に夢中で中学では野球部に入部)(村上龍の『一三歳のハローワーク』は出版されてはおらず、ひたすら野球、野球)(『六五歳のハローワーク』が刊行されないものだろうかと考えています)

一九五七年三月 山形県立山形工業高等学校(建築科)卒業

(入学早々に野球部に入ったが、体を壊して、少したつて小さい頃から絵が好きだったことから絵画部に入部)

一九六一年三月 慶應義塾大学法学部政治学科卒業

一九六三年三月 同大学院社会学研究科修士課程修了 社会学修士

一九六四年四月 慶應義塾大学法学部助手

一九六六年三月 同大学院社会学研究科博士課程修了(単位取得退学)

(一九七〇年四月より助教となりわたしにとってはゼミ一期生を担当することになり、現在の四年生が最後のゼミ生でこれまでに三期生までのゼミ生と出会ったことになり、計四五六名になります。一九七〇年頃には十時厳周先生が香港の中文大学に訪問教授として留守をしておられたこともあって、当時十時ゼミ生だった松井清さんらの学年を預かったこともありました)

一九七五年九月 社会学博士(慶應義塾大学)

一九七七年四月 法学部教授

二〇〇四年三月 慶應義塾大学定年退職

(この間、一九七〇―七一年、プリンストン大学社会学部、一九八八年、延世大学校、一九八九年、ノッティンガム大学社会学部に遊学)

この略歴からおわかりのように、学校の専攻も転々として一種の「変わり者」です。高校で工業高校の建築

科、大学は法学部政治学科、大学院は社会学研究科と変転したが、わたしをよく叱り陰ながら励まし続けてくださった中学の先生が「あいつは変わり者だ」と言っていた話を後にきいたことがあるが、生来の変わり者のところがあるようにも思えます。わたしが社会学を学問として取り組んでみようかと考えるようになったのは、もっと根深いものがあつたのかも知れません。

社会学への関心と志。わたしにとって社会学との出会いはいつ頃から始まっていたのだろうか。それは、確かなものではないのですが、「社会学」という講義があり学問があるということはつきりと知つたのはやはり慶應の法学部政治学科に一九五七（昭和三二）年四月に入学して以降のことだと思えます。東北地方の山深い山村、寒村（貧村）（この村は、無着成恭の『山びこ学校』（山形県山元村立中学校）の村です）で生まれ、少年時代を地方都市の近郊で育つて高校は工業高校の建築科を卒業して、辛うじて大学入学を認められて東京という大都会で学生生活を始め出したわたしにとっては、見る物、聞く物、接するもの全てが新鮮であり驚きであつたように思われました。ある種の異文化体験であつたといえます。同じ日本には違いないのに、自分が育つた地方や生活環境、生活程度などの異なり様に驚いていたりしました。大学の授業にも出るには出ていたが、散歩癖のせいによくブラブラと歩き回っていたような気がします。

「社会学」の授業は当時は二年生時の科目となつており、アメリカ、ハーバード大学留学から帰国なされて間もない生田正輝先生の担当の科目で、わたしにしてはよく出て聴いていた授業のひとつでありました。その社会学の授業の夏休み中のレポート課題として書いたレポート（「都市と村落との相違についての社会学的な分析」と題する）の下書き原稿が今でもわたしの机の中にあります。全く恥ずかしいものでしかないのですが、大都会での自分自身の新しい生活体験もあつてか次第に社会学や哲学（当時はキュルケゴールやサルトルなどの実存主義哲学）、歴史学などに興味をもち始めていったようです。

父や母の生涯、父との根深い葛藤、自らの生い立ちや生活環境、大都會で新しい生活体験、政治運動や社会運動への失望や不信などが渦巻いて、大学三年のおしまいころから学問としての社会学への関心と志を少しずつ強めていったように思われます。この当時は、政治の動きでは岸内閣から池田内閣に替わっていく時期で安保闘争のまっただ中で三〇万人のデモ隊が国会を包囲するなど、また三井三池の無期限ストがおこなわれるなど激動期でもありました。浅沼稻次郎が右翼少年に刺されるという事件があったり、深沢七郎「風流夢譚」(雑誌『中央公論』)が掲載を巡っての社会事件が起こったり、社会学者、思想家の清水幾太郎などが活躍していた時期でした。ゼミの先生であった米山桂三先生やめぐりで「農村社会学」を聴講していた文学部の有賀喜左衛門先生との出合いや励ましも大きかったと思います。四年生時の秋に大学院(社会学研究科)を受験して辛うじて合格しました。ときどき質屋に世話になったり古本を古本屋に売りにいったりの貧乏学生でもあったので同じ頃に新設の「アジア経済研究所」の入所試験も受験したが、勉強不足だったようで落ちました。

もたもたしながらも、わたしなりに、結合関係としても権力関係としても広く人間関係の構造と動態をすこしずつ解明していけるようにしたいと考えようになっていったようです。社会学との出会いのなかで、心の底でできることなら静かに闘う者、静かに闘う研究者になりたいとも願うようになっていったように思います。

わたしは、材木屋に生まれたせいかわ樹木も好きだが、元來人間が好きで、人間が面白いとつねづね感じてきました。自分の生い立ちや身近な人々との関係、より大きな生活世界との関わりを少しずつ考えていくことの面白さや大切さを感じ取るようになっていったのだと思います。後に書物を通じて出会う C・W・ミルズのいう「個人環境にかんする私的問題」と「社会構造にかんする公的問題」との関連・接合、自分史と社会構造との関連への関心、「社会学的創造力」(C. W. Mills)への関心、興味が湧いてくるようになったのだと思います。私的問題、自分史そのものも生活や歴史のなかで変化していきますし、公的問題、社会的世界やそれらの諸問題も変化して

いきます。そうした動きのもとでは、自分にとつての生きることの意味や学問的な課題や世界の関わりを模索し続けることが大切になっていくのかなあと思います。

その限りでは自らの暮らしのなかで、歴史の歩みのなかで、時には立ち止まったり、錨を下ろして停泊したりして、来し方と行く末を考え今後の願いや夢、希望を探してみるといふ意味で人生上の career anchor の試みも大切かとも思います。また、「よりよく生きる」うえでは、人間関係の構造も慣れ親しんだ狭い関係に閉じこめないで、広く人間と社会、文化、自然、歴史との関係をあれこれと感じ取り考えていくことが必要になってきていると思います。

### 三 近代日本社会学史研究

大学院や法学部の助手や専任講師の頃には農村社会学や社会移動論、後進国・低开発国論（発展途上国論）、広島島の原爆被爆者の生活や社会変動（原田勝弘さん、佐藤茂子さん、中川清さん、下田平裕身さんなどが二緒）についての調査などを中心に勉強を進めていました。研究としては、どれもまとまったものにはなっていませんが、人間生活や研究・調査の在り方を学ぶうえでのわたしなりの基本的な姿勢や原点を培っているような気がしますが、近代日本社会学史への関心。これまでのわたしの学究生活の前半期は主に社会成層・階層の理論的研究、比較社会学に関心が向けられてきましたが、後半期は近代日本社会学史研究に集中してきています。

一九七〇―七一年にわたしは福沢基金のお陰でアメリカに留学してプリンストン大学の社会学部におりました。主に M. J. Levy と「構造機能主義者の近代化論、比較社会学の授業を聞いたりしていましたが、そこでわたしが日本の歴史や日本の社会学の動きをいかに知らないかということを感じました。プリンストン大学の社会

学部には社会成層論で知られていた Melvin M. Tumin という学者がいたのですが、丁度わたしがプリンストンに行ったその年にコロラドのデンバー大学に移りました。また、鶴見和子さんが一九六〇年代にプリンストン大社会学部におられて「大変に優秀な院生」であったことをリーヴィ先生や友人の Gilbert Roman から聞かされました。わたしはぶらぶらしているばかりの劣等生でした。

帰国して、日本の社会学史や社会調査の歴史に関心を強く持ち始めて、もともと怠け者でできのよくない自分を自覚してマイ・ペースで進めていこうと考えるようになりました。そこで、帰国してまもなく試みたのが原田さん、佐藤さん、霜野さん、松井清さん、田中重好さん、柄沢行雄さんなどの友人達や当時院生だった有末君・鹿又君たちと一緒に「月島調査」でした。この「月島調査」は一九二〇年前後に実施された高野岩三郎を中心とした社会踏査 (social survey) による調査に刺激・触発されて試みられたものです。歴史研究編と社会調査編に分けて研究しようとしたものでしたが、いずれも途中で止まってしまったように思います。限られた経験ですが、中央区月島・佃島での社会観察・社会調査、歴史研究のあたりからわたしの近代日本社会学史研究が少しずつ始められ広がっていったように思います。わたしの慶應義塾での在職四〇年の前半期の主な関心、専攻領域は社会成層論・社会階層論ですが、後半期の研究関心は主に社会調査論、近代日本社会学史研究に傾いていったように思います。前半期は勉強がなにか忙しいようなところがありました。後半期には少しマイペースで進めてきたようなところがあります。劣等生で、できもよくないので特に他の人があまり研究しない領域に傾いていったように思います。

社会学史研究への主要なアプローチ。社会学史研究の主要な論点ないしアプローチを整理すると、

- (a) 社会思想ないし社会学思想、社会学説、社会学上の理論的パースペクティブ (あるいはパラダイム、モデル等)、イデオロギーを基本的な論点として社会学史研究を進めようとする試み。

(b) 人々の生活、社会問題、社会観察・社会調査、社会学理論、政策的課題等の相互の関連に焦点をあてる  
試み。これは実際の社会問題や社会観察・社会調査に重点をおいて試みる経験的社会論の系譜に連なる学  
史研究である。

(c) 家族、農村・都市（地域社会）、教育、宗教、労働・職業・産業、政治、階級・階層、社会意識、文化、  
マス・コミュニケーション、男性と女性、環境、社会問題、社会福祉などの社会学の個別専門領域、ある  
いは専門分化過程を対象にして社会学史を構成しようとするもの。

(d) 学会や研究組織の活動のように、社会学を中心とした学問運動・活動の組織化および制度化の動きに焦  
点をあてる試み。

(e) 社会学の学問運動・活動を担った個々の人々の社会学上の特徴や足跡、生涯、生活史などとの関連に重  
点を置きつつ社会学史の展開を跡づけようとするもの。

わたし自身は経験的、実証的な社会学史研究をやっていきたくないと願い、考えてきました。  
そこで当初は主に社会学史研究のためのいくつかの復刻編集作業なども行いました。これらの復刻編集作業は、  
月島調査などからは一〇年代後の作業ですが、

『明治期社会学関係資料』（全一〇巻） 龍溪書舎、一九九一年

『現代社会問題研究』叢書（全二五巻）（共監修） 龍溪書舎、一九九三年

『戸田貞三著作集』（全一五巻）（監修） 大空社、一九九三年

『奥井復太郎著作集』（全九巻）（共監修） 大空社、一九九六年

『日本社会学院年報』（全一一巻） 龍溪書舎、一九九九年

『東京市京橋区月島ニ於ケル実地調査報告』第一巻・第二巻、龍溪書舎、二〇〇二年

『近代日本社会学関係雑誌記事目録』 龍溪書舎、一九九七年

これらは出版社との共同作業でもあり出版社の助けがなければ到底できない仕事でした。北村正光さんの龍溪書舎に関しては先輩の内山秀夫さんにはじめに紹介をいただいたりしましたし、同僚や大学院生にも随分と助けをいただきました。

『近代日本社会学者小伝―書誌的考察―』（共編、勁草書房、一九八八年）。これは竹村英樹さんとの共編ですが、一九世紀前半から二〇世紀後半に至るまでの近代日本の社会学の歩みにそれぞれに関係した一四〇名の個々の人々の人物誌、書誌に焦点をあてた「小伝」であります。特定の観点や思想、理論等にもとづいてその人物や足跡を評価したり「評伝」を書くというよりも、まずはそれらの前にそれぞれの人々に関する年譜や略伝、著作文献目録、研究参考書誌などの基礎的な資料をできるだけ広く集めて確認しておきたいという意図からまとめられたものです。

こちらにも、今日この会場にもいらしている多くの同僚や研究仲間との共同作業のお陰でできたものです。値段の高い本ですが、四月初めに五〇〇部増刷することです。こうした復刻編集作業や『近代日本社会学者小伝―書誌的考察―』を進めることで、わたしの近代日本社会学史研究の主要なアプローチのなかでは(e)にあたりようになります。この書は、先にあげた社会学史研究の主要なアプローチのなかでは(e)にあたります。

『近代日本社会学の展開―学問運動としての社会学の制度化―』（恒星社厚生閣、二〇〇三年）は、先の社会学史研究の主要なアプローチの中でいえば、(d)にあたります。学問運動・活動の「制度化」(institutionalization)という視点から近代日本の社会学の展開を再考察してみようとしたものです。ごく一般的な説明の仕方をすれば、学問運動・活動の組織化(organization)と制度化(institutionalization)とは、人々が一定の環境のもとでさまざまな欲求(この場合には学問的欲求ですが)によって行動・運動・活動(学問行動)をつうじてその環境に働き

かけ、そうした行動を他の人々と共同しつつ組織化し、一定の持続的な運動・活動として定着させ習慣化（慣習化）し規範的な行動様式を標準化し複合化していく動きであるといえます。

学問運動・活動に即してより具体的にいえば、①（学問を志向する）人々が広く物事の現象（自然・人文・社会現象であれ、経験・非経験の現象であれ）の探究や説明、「現実」に対する直接・間接の学問関心・欲求を媒介にして、②一定の人的ネットワーク、コミュニケーション・ネットワーク、集団・組織を作り、③成員相互のそして広く社会のなかで交流を図りながら、社会学などの学術的・専門的な学問活動が研究会、学会、大学、その他の集団や機関・団体等の結成設立を通じて（組織化）、④一定の資金源、情報（交換）活動、定期的な研究報告会などの会合運営や機関雑誌等の刊行を通じて、⑤それらの活動がある程度恒常的に、規則的・規範的に、正統的に継続され、人々の間で広く承認されながら展開していく過程（制度化）を意味しています。当初に組織化されても、その後にも制度化されていかなないこともあるし、一定の時期にわたって制度化されつつもその後自立的に持続化されないこともあり得りえます。

新明正道は「日本社会学会史学会の出発にあたって」（『日本社会学会史学会』の設立、一九六〇（昭和三五）年）のなかで次のように述べていました。

「……私たちにとつてもっとも関心の強い、またもっとも手近な学史研究の対象は、外国の社会学ではなくて、日本社会学である。私たちが日本人として日本のなかに生活し、そのなかで社会学の研究に従事している以上、これはむしろ当然すぎることであって、私たちは何といつてもまず日本社会学の学史的研究に力を傾注しなければならないはずである。」（新明正道「日本社会学会史学会の出発にあたって」『社会学史研究』会報第一号、一九六二年、一頁）

「この学会の仕事の主要な目標が学史の研究におかれているのはもちろんであるが、私たちは出来るだけこれを社会学の研究、とりわけ現代社会を対象としたそれと結びつけ、学史的研究を推進することによって同時に社会学的研究その

ものをも推進するように心がけなければならない」(同、三頁)

ここでは、社会学史研究を①日本の社会学史、②外国の社会学史、③現代社会の社会学的研究の三つの研究によるトライアンギュレーション(三角測量)が意図されています。近代日本における学問運動・活動の組織化・制度化は明治期の「社会学会」「社会学研究会」の例のようにまずメゾ・レベル、ローカル・レベルでの主に東京を中心に広く社会学運動に関心を寄せる人々が糾合し組織化を図っていきました。次いで大正期の「日本社会学院」は特に東京帝大の建部遯吾の主宰のもとで関西の京都帝大の米田庄太郎など他の大学関係者などをも組み込んでややマクロ・レベル、ナショナル・レベルへと組織化・制度化が広がり、大正末期からの「日本社会学」の創立は国家体制の進展とともに東京帝大を軸に一層マクロ・レベル、ナショナル・レベルへの制度化として拡大していくという一般的な図式を描きだすことができます。

このわたしの書では、高木正義、布川孫市、田中一貞、建部遯吾、下出隼吉などこれまでに日本社会学史研究のなかではあまり取り上げることのなかった人物の発掘作業とともに、これらの人たちが中心にかかわった明治期の「社会学会」「社会学研究会」、大正期の「日本社会学院」、大正一三年設立の「日本社会学」などの組織化、制度化の問題を考察しています。今日では国際的な社会学会やグローバルな学問活動との関連の考察が一層必要になってきていると思います。

帰するところ、戦前・戦中期までの近代日本における学問運動・活動としての社会学の制度化の動きは、一面ではそれらを通じて学問活動の活発化・多元化・自立化・自律化・開放化の動きを内包・内在化しつつも、他面では西欧列強に伍して帝国主義的な国民国家を急速に樹立するに役立てるといふ当初より制約づけられた学問的展開のもとで専門個別化された最新・先端の学問動向の紹介導入という傾向が強く、世間や世の中、国家、社会を生きる人間生活の実相や事実から遊離しがちとなり、結果的に自らの学問的世界に講壇化・一元化・自立化・

他律化・閉鎖化していく傾向を導き、非常時体制のもとで現実への追従、翼賛的な同調の活動を余儀なくされていったといえます。人間と学問、人間と歴史との橋渡し、学問と学問との橋渡しをするといった学問の根本的な課題からは少はずつ遠のいていくところがあつたといえます。

その後の歴史的な環境の変化に対応しきれないで、足元をすくわれ批判的科学としてよりも時局に追従し結果的に軍国主義の轍を踏むことになり制度の硬直化を来すことになっていった。長い眼でみて、戦後日本においても近代日本の社会学の歩みを知的遺産の批判的継承として深めて再考察するところは次第に薄らいできたように思われます。その意味では自らのよつて立つ土壌を深く耕すことが必要かと思えます。先進・先端の「モデル」をただひたすら追いかけてもとめる文化形成・学問形成のありかたを再考していく必要があるのではないでしょうか。今日の言葉でいえば、glocalizationの試みともいえるかと思えます。

『近代日本における社会調査の軌跡―社会観察・調査と社会学―』（恒星社厚生閣、二〇〇四年三月刊）（これは、先代の社会学史研究のアプローチに照らせば、(b)にあたります）。月島調査後に主に大学院の授業で当時の院生、竹内治彦・平野隆・竹村英樹・大矢根淳・中村良二・吉野英岐・村上綱実・清川郁子・堀川三郎・岩永真治・そして金勲・南裕子の諸君、また、訪問研究員としていらしておられたドイツのレギネ・マティアスさんなどが参加して、近代日本の社会調査史研究を開始しだして『近代日本社会調査史』三巻本（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）をまとめるなど（慶應義塾大学出版会、一九八九、一九九一、一九九四年）のことも試みました。丁度この頃から亡くなられた中央大学の島崎稔先生や吉原直樹さん（現在東北大学）、橋本和孝さん（現在関東学院大）、浜谷正晴さん（二橋大学）などの全国の他大学の先生方とご一緒して「社会調査史研究会」に参加することができて幸いでした。このわたしの近々刊行される『社会調査の軌跡』はこうした試みに支えられてまとめることができました。

自らの経験的世界、生活世界、わたしたちをとりまく社会的世界、歴史的世界をめぐる福沢のいう特に事物の

「視察」、「推究」に関わる試みを、近代日本の歴史的な展開過程で跡づけようと意図したものです。わたしの祖父・祖母、父母、わたし、の世代、明治初年から第二次世界大戦終戦時（二八六八—一九四五年）ころまでの広い意味での経験的世界を主として社会学の展開のなかで社会観察や社会調査がどのように試みられてきたのか、という社会調査史の視点から、を再検討してみようとしたものです。（経験的社会論）

社会学史や社会調査史のなかで、「全般的には第二次大戦に至るまでのわが国の社会調査の歴史はきわめて貧弱であったというのほかはない」（福武直『社会調査』岩波全書、一九五八年、二七頁）という指摘と認識は、既に戦前の戸田貞三の『社会調査』（一九三三年）のなかで同様のそうした言及がされてきたところでもあり、かなり一般に共有されているところといえるかもしれない。しかし、本書では、結果的には確かにわが国の社会観察・調査の歴史の「貧弱」「貧困」が指摘されたとしても、はたして近代日本の当初から「貧弱」「貧困」であったのか、どのように「貧弱」「貧困」化していったのか、何故「貧弱」「貧困」化していくことになったのか、という問題意識から近代日本の社会調査史を再考察したいというのが意図です。その意味ではわたしたちの社会調査史研究、社会学史研究自体が足元を見ないで研究が深められないことによる「貧弱」「貧困」ではなかったかとも考えます。

近代日本の社会観察・社会調査の歩みを本書では、大きな戦争を区切りにして(一)その萌芽期（二八六八—一九一四年）、(二)展開期（一九一五—一九三一年）、(三)制限期（崩壊期）（一九三二—一九四五年）の三つの時期に区分しています。より具体的には江戸時代の巡察や社会観察（当時の人たちは意外と旅好きで好奇心も旺盛、旅をする）、幕末や明治前期の社会観察や調査、松原岩五郎や横山源之助、月島調査、星野鉄男、国勢調査、戸田貞三の家族調査、奥井復太郎の都市社会調査、失業調査などを取り上げています。

福沢諭吉は『学問のすゝめ』の第一二編のなかで「学問の本趣意は読書のみならずして精神の働きに在り」と

して、(一)実地に事物を視察(「オブセルヴェーション」)すること、(二)事物の道理推究(「リーゾニング」)して自分の説をつくること、(三)読書をすること、(四)人と談話をすること、(五)書を著すこと(著作)、(六)人に向かつて言を述べ演説すること、の六つの働きをあげています。「視察」「推究」「読書」は「智見」を集め、「談話」は「智見」を「交易」し、「著書」「演説」は「智見」を散ずる術であるとして、精神の働きを構造化してとらえています。福沢の人間の精神的な働きを構造化して把握しようとする試みは、すぐれた卓見であると考えます。

福沢は、また、慣れ親しんできたものを自明化せずに、また旧慣に(自らの閉じられた世界や考えに)「惑溺」(そのことにすっかりおぼれてしまう、迷い溺れ、本心を失ってしまうこと)せずに好奇心を持ち続け、よく観察すること、実験してみること、「人間交際」、「人間交際」における「独立自尊」の重要性、「人の智徳」を自由闊達にしていくことに言及していたことを想起したいと思います。

#### 四 「戯去戯来」

わたしは、本年三月末をもって慶應義塾大学をいよいよ定年退職しますが、これまた福沢のいう「戯去戯来」の考えに委ねて、長くお世話になった多くの方々、そして尊敬する福沢諭吉にも出会えた慶應を去ろうと思えます。わたしの定年後の生活(①ひとつはひたすら畑仕事、少しは勉強もしよう。②H. Spencerの社会思想、社会学についての勉強、③福沢諭吉の社会学思想についての勉強、④わたしが生まれた「山びこ学校」の村でのフィールドワーク)も楽しく続けていきたいと考えています。

感謝。長い間、拙いわたしを支えてくださって有り難うございました。皆さんとの出会いを大切に元気で楽しく生きていきたいと思えます。ご静聴有り難うございました。(二〇〇四年三月一三日)